

令和 2 年度博物館協議会議事録（要旨）

1 協議会概要

日 時：令和 2 年 11 月 6 日（金）13:30～16:00

場 所：北九州市立自然史・歴史博物館 1 階ガイド館

出席者：阿部委員、井上委員、岩松委員、緒方委員、杉山委員、染川委員、富田委員、針尾委員、三島委員、山本委員（協議会）

★委員の全員が出席しているので、「博物館協議会運営要綱」第 7 条が定める定足数（委員の半数以上）に達している。

伊澤館長、小坪副館長、栗原普及課長、真鍋自然史課長、日比野歴史課長、安永普及係長ほか（博物館）

議 題： 1 新型コロナウイルス感染症対策について
2 平成 31・令和元年度事業実績について
3 平成 31・令和元年度博物館評価について
4 令和 2 年度事業計画について
5 その他（意見交換）

傍聴者：1 名

◎日比野歴史課長より進行がなされた。

◎伊澤館長、小坪副館長より挨拶がなされた。

◎新任委員の阿部委員・針尾委員より挨拶がなされた。

◎日比野歴史課長より委員の紹介がなされた。

◎事務局については議題 4 に関わる配付資料の組織図を参照していただくこととして、紹介を省略した。

2 新会長の選任

◎事務局より、議事に先立ち、伊澤前会長の退任（館長就任による）に伴い、新会長の選任が必要であり、「北九州市立自然史・歴史博物館規則」の第 5 条で委員の互選により選任することと定められていることから、各委員に対して、自薦他薦を問わず、新会長について提案していただきたいとの依頼をおこなった。

◎山本委員より、伊澤前会長の後任で、長年博物館の活動に協力・助言してこられたとともに、博物館の外部評価小委員会の委員も務めている阿部委員を新会長として推薦したいとの意見が出された。

◎他の委員も賛同し、阿部委員も了承して、阿部委員を新会長に選出した。

◎阿部委員が会長席に移動し、阿部新会長より会長就任の挨拶がなされた。挨拶の最後に、岩松副会長に引き続き副会長を務めていただくことについて確認がなされた。

◎岩松副会長が承諾し、他の委員も賛同した結果、引き続き岩松委員が副会長を務めることに決定した。

◎これ以降の議事については、日比野歴史課長から阿部新会長に進行を交代した。

3 議 事

- ◎阿部会長の司会により議事が進められた。
- ◎博物館より議題 1 および議題 2 について説明がなされた。 【 】は説明者

議題 1 新型コロナウイルス感染症対策について【安永普及係長】

- ◎博物館では、国（文化庁）の通知や日本博物館協会が定めたガイドラインを参考に、「3 つの密（密閉空間、密集場所、密接場面）」の発生を防ぐことを基本方針として、感染症拡大予防対策を実施している。感染症拡大の状況に応じて、対策は随時改変し、今後も継続しておこなっていく。
- ◎「1 博物館の臨時休館と限定開館」について。「臨時休館」は延べ 104 日間におよんだ。「限定開館」は土・日・祝日を閉館し、平日のみの開館で、延べ 42 日間であった。8 月 3 日より Web 予約システムを導入し、8 月 8 日より土・日・祝日も開館した。
- ◎「2 対策の組織・運営」について。運営組織については、5 班のワーキンググループを組織して対策を検討した。①施設管理全体や救護などの全般の対策班、②イベント・講座やボランティア活動などのイベント班、③予約システムの構築などの入館調整班、④コロナ対策中の展示手法検討などの展示・情報発信班、⑤物品調達や補助金申請などの庶務班の 5 班を編成した。
- ◎「3 感染症拡大予防の主な取り組み」について。「安全確保」「施設管理」「入場制限」「情報発信」の各対策に分けてまとめている。
- ◎「安全確保」対策について。大きなポイントは入館者の動線を一方通行にして、密集防止の対策を講じたことである。再開館の当初は入口と出口を別にして、入口を団体入口側に変更して、一方通行を徹底した。現在はさらに入口・出口を同じ場所に変更している。
- ◎イベントや講座も中止したが、9 月より一部再開している。
- ◎「施設管理」について。密集防止対策として、第一人気のエンバイラマ館については閉鎖を続けていたが、11 月 4 日より対策を講じて再開した。密接防止対策として、ハンズオン展示やタッチパネル解説の使用を停止したが、11 月より状況を見ながら、順次使用を再開していく予定である。子どもたちに人気のスタンプラリーについては、現時点で中止が続いている。音声ガイドの使用も停止している。密閉防止対策として、文化庁の補助金事業に申請をおこない、総事業費約 2,000 万円をかけて、空調の改修をおこなっている。
- ◎「入場制限」について。Web 時間制予約システムを導入した。予約システムのトップ画面では、現在 30 分ごとに更新しているが、リアルタイムで混雑の状況も表示している。それによって、来館者にとっても自発的に密を避けて来館できるような工夫をしている。
- ◎団体については、8 月まで受入れを中止していたが、9 月より人数調整をおこなって受入れを再開している。今後は、個人のみを対象として実施している Web 時間制予約システムを団体についても運用できるように、導入を検討している。
- ◎「情報発信」について。ホームページ等での掲載をおこなっているが、北海道博物館が発信している「おうちミュージアム」に参加して、「おうちでいのちのたび博物館」

をホームページや SNS で公開している。各学芸員が博物館における活動や展示、各自の専門分野等の研究成果について動画を製作して、随時公開している。公開開始から 10 月末現在まで動画は 27 本作成し、アクセス数は 7,513 再生となっている。

議題 2 平成 31・令和元年度事業実績（博物館年報）について【栗原・真鍋・日比野課長】

◎栗原普及課長より、博物館の組織・運営体制（年報 1 頁）、博物館協議会の開催状況（2 頁）、令和元年度予算（3 頁）、入館者の状況（9 頁）、視察受入状況（10 頁）、広報・報道実績（11 頁）、教育普及活動（28 頁）について報告がなされた。

*歳出は 3 億 2,502 万 7,000 円で、前年度に比べると、559 万 3,000 円減少している。市の財政状況に鑑みてシーリングがかかる費目がある。

*令和元年度は新型コロナウイルス感染症の影響によって、2月28日から休館となり、入館者数も 45 万 2,863 人で、前年度より 3 万 1,153 人減っている。しかし同じ 2 月末で比較すると、平成 30 年度は 45 万 61 人。令和元年度は 2 月 27 日までの数字で 45 万 2,863 人であり、そのまま開館していれば、前年度を上回る数字になったのではないかと予想される。

*ホームページのアクセス数は 50 万 8,759 件で、前年度の 45 万 3,289 件に対して、12.2%増加しており、当館に対する関心の高まりを示していると考えられる。

*SNS での情報発信数は前年度の 395 件に対して、令和元年度は 412 件となっており、取り組みを増やしていると言える。

*教育普及活動の柱と言える博物館セカンドスクール事業については、本市における文化振興計画のなかの施策の 1 つとして取り上げられている、非常に重要なものである。「博物館を第 2 の学校として、子どもたちに来館の機会を創出し、新しい発見や感動をもたらす」という目的で、3 つの柱で活動をおこなっている。うち博物館への誘致事業について、令和元年度は 1 万 2,644 人の修学旅行の来館者があった。学校教育支援事業や家庭教育支援事業として掲げている業務もおこなっている。

*今年度になって、やはり学校から団体の受け入れを再開してほしいという声が非常に高まっていたが、ようやく 9 月から団体受入を再開した。博物館も子どもたちの活気あふれる声が満ちあふれてくるようになった。コロナ禍ではあるが、安全対策に配慮しつつ、しっかり取り組んでいきたい。

◎真鍋自然史課長より、春の特別展「コレクション大集合 モノが語る私たちの暮らしと自然」の開催（年報 16 頁）、資料の登録状況（39 頁）、研究業績（47 頁）について報告がなされた。

*春の特別展「コレクション大集合 モノが語る私たちの暮らしと自然」は自然史課と歴史課が共同でおこなった展覧会で、入場無料で実施し、2 万 3,154 名の観覧者があった。

*資料登録状況については約 250 点にとどまり、一昨年度と比べてかなり減少した。大きな反省事項である。

*研究業績については、論文は頑張っけて発表している。養島学芸員の論文が昨年度の日本昆虫学会論文賞を受賞したことをここに強調したい。

◎日比野歴史課長より、秋の特別展「九州発！棟方志功の旅 ― 彫り起こされた足跡と

交流一」の開催（年報 15 頁）、ぼけっとミュージアムの企画展や常設展のテーマ展示（18～21 頁）、東アジア友好博物館交流事業（24 頁）、北九州市東田地区ミュージアムパーク創造事業（26 頁）、資料収集状況（40 頁）、研究業績（51～52 頁）についての報告がなされた。

- *秋の特別展「九州発！棟方志功の旅一彫り起こされた足跡と交流一」については、お手元に図録を配布している。「世界のムナカタ」と呼ばれた棟方志功については、九州初となる個展が昭和 29 年に小倉で開かれたことなど、北九州と関わりの深い方であったことはこれまであまり知られていなかった。当館の福岡学芸員の研究成果に基づき、北九州と棟方志功との関わりや棟方志功にとっての北九州の意味ということについて考えた展覧会である。
- *企画展・テーマ展示については、昨年 10 月に 94 歳で亡くなった堀切辰一氏の古布コレクション「襤褸」から「縞」に注目したもの、北九州市と大連市の友好都市 40 周年を記念したもの、同じ時期に北九州の木製品に関する考古学の展示や小倉織に関するもの、毎年恒例の暮らしの道具の変化に関するもの、小倉城における歌舞伎公演に合わせた小笠原騒動に関するもの、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」に関わる県の巡回展、新たな 1 万円札の「顔」となる渋沢栄一と北九州の関係を探るものなど、時宜に適った内容や幅広いテーマでおこなった。
- *東アジア友好博物館交流事業について、昨年度は当館で館長会議と事前協議である実務者会議を開催した。現在は衣食住をテーマに、3 館それぞれのコレクションを紹介する巡回展を実施している最中であり、最終回の住まい「住」に関する、仁川広域市立博物館の企画内容や開催方法について協議をおこなった。
- *当館を中核館とする「東田ミュージアムパーク実行委員会」が、文化庁の「地域の美術館・歴史博物館クラスター形成支援事業」の助成を受けて、「北九州市東田地区ミュージアムパーク創造事業」を実施しており、昨年度は 2 年度目に当たり、関連の展示（連携企画展）や事業をおこなった。
- *資料収集について、昨年度の登録点数は 417 点で、数としてはそこまで多くないが、特色のある資料を収集することができたと考えている。購入資料としては、小倉藩小笠原家の家紋「三階菱紋」があしらわれた馬具を購入した。江戸時代初期の年代が刻まれていて、大名道具に詳しい方から大名級の人物が所用したものと思われるとの指摘をいただいた。小倉藩初代藩主小笠原忠真の所用かどうかわからないが、小笠原家の当主クラスが使ったものと考えられる。
- *研究業績については、論文等について、もっと頑張って取り組んでいく必要があると思っている。

議題 1・2に関する質疑応答 ■協議会委員 □博物館事務局

- 予約で人数制限して入館を実施したと言うことだが、コロナ対策以前の通常の入館者数と、制限している際の入館者数はどれくらいの比率なのか。
- 従来は人数制限がなかったので、夏の特別展の際には、お盆の時期などは入館者数が 8,000 人を超えるような日が数多くあった。再開館後は 1 時間 300 人、1 日 2,100 人が最多である。夏の特別展の時期やゴールデンウィークの時期を考えると、従来のまま

では混雑が生じるので、Web 予約は絶対必要ということで導入した。

■今年夏は特別展がなく、ゴールデンウィークも休館していた。そういう時期は別として、9 月くらいであれば、例えば入館者数は前年度の半分くらいかなと勝手に想像していた。

□正確な数字はまだ出していないが、平日はほぼ同数である。ただし当初は団体入館者をまだ受け入れていなかったため、その分の減少はあるが、団体以外の入館者の数はほぼ同程度だと思う。

■それほど人数制限をおこなっているという感じではないのか。

□幸いに現時点ではそうである。

■入館を希望する方はほとんど断らずに入館させたのか。

□そうしたと思う。

■9 月から人数調整のうで団体受入を再開したということだが、学校では修学旅行も判断を迷っている状態が続くなかで、どのような団体が来館しているのか。

□市内の小・中学校の来館が多いようである。修学旅行については、年度の当初は申し込みがかなりあったが、他県からの修学旅行はほとんどキャンセルになっている。

■感染症予防対策の話聞くなかで、早め早めの取り組みをしている印象を持つ。先日博物館関係の学会に参加したが、全国の博物館の取り組みについてはみな注視している。今後もこういう状況が全く起きないとは限らない。丁寧な対策や計算に基づく対策は他の博物館にとって非常に参考になることだと思う。報告やまとめを発信していただきたい。

□私たちの取り組みはまだまだ始めたばかりである。来年の夏を見据えると、今後どうすればいいのか、しっかり見極めながらやっていかないといけない。国などの動きも注視しながら必要な見直しをやっていく。ワーキンググループも活動を継続していて、そういう取り組みを進めていきたいと考えている。

■職員が在宅勤務をしなければならないようなことはあったのか。

□北九州市では在宅勤務制度は現在も継続している。博物館も一時的に在宅勤務を導入したが、再開館に際して、やはりマンパワーが必要になるので、博物館として総合的に判断して、職員については通常の出勤体制を採った。しばらくの間、土・日・祝日は休館していたので、原則的に全員を休みとした。事務室などの感染防止のために、飛沫防止について万全を期して対策を講じた。

■棟方志功展の図録は大変立派で素晴らしいと思う。富岡学芸員が論文を書かれていて、その次に執筆されている石井さんはどういう方なのか？

□石井頼子氏は棟方志功の孫で、棟方志功研究の第一人者でもある。展覧会の監修者としてご指導いただいた。

■青森の棟方志功記念館に何度か行き、非常に感激した経験があるが、このように青森から遠く離れた場所で、充実した立派な内容を発信できるのは素晴らしい。ただし、入場者数が少ないのは、別に料金を払うからなのか。コレクション展は 2 万 3,000 人も入り、棟方志功は少ないのが残念だ。期間が短いのか。

□通常の秋の特別展は、大体ワンコインの大人 500 円で料金設定をおこなっているが、今回は 800 円という設定で、この特別展だけに来る方が多かったという印象を持って

いる。入場者数については1万人に達しなかったが、日割りで見ていくと、日増しに増えていったということがある。ある程度情報が広がると、今まで来ていなかった、美術館に行くような方々も来ていただくようになった。そういう意味では人数だけではない変化、新しい来館者の開拓にはつながっていく、そういう展覧会になったと思う。

■素晴らしいと思う。すぐに数値を持ち出しがちだが、それぞれの展覧会で特徴や条件、制約がある。「ウマ展」の報告がなかったが、これは未開催ということだが、いずれ見せてほしい。きっと心血を注がれたらうに、公開できないのは残念すぎる。

■広報・報道に関して、SNSの発信については、館としてのアカウントがあって、個人ではないのか。それぞれ担当者がアクセスできるような形で発信しているのか。

□普及課職員のうち担当者を決めて発信するようにしている。

■在宅勤務などの「壁」はなかったのか。

□在宅勤務などはあまり影響がなく、博物館で動画なり、それぞれのコンテンツを作成して発信するという方法でおこなった。

■予約システムはどのような形で導入したのか。

□文化庁から新型コロナウイルス感染症対策に関わる助成制度の一つとして、文化施設の感染症防止対策事業がある。Web予約システム—時間制来館システムの導入事業については補助対象となっていた。補助制度があったからというわけではないが、館としては混雑の解消がやはり三密防止のために絶対必要ということで、この補助事業を活用して8月に導入した。

■既存のシステム（パッケージみたいもの）を導入したのか。

□いろいろと検討したが、地元企業による既存のシステムがあったため、それを博物館仕様に加工して導入した。

■博物館評価とも関わると思うが、年報は今後も外部評価を受けるものである。そうだとすると、大切にすべきは前年度との比較であり、口頭で説明するのではなく、年報のなかでもきちんと記録として残すべきである。評価を受ける際に数字を見てほしい場合もあると思う。

□ご指摘のとおり、説明するには比較するものがないと分かりにくいと思う。年報にもしっかりと記載していくということで、再検討していきたい。

【休憩】

議題3 平成31・令和元年度博物館評価について

①経緯説明【阿部会長】

◎博物館評価については本年度から本格的に実施することになった。各委員にはすでに博物館の自己評価と外部評価小委員会の素案をお送りし、予め見ていただいている。

②自己評価に関する説明【真鍋課長】

◎評価基準について。北九州市の目標管理制度を参考に、Aは数値目標の場合は120%基準をクリアした場合と設定されている。Bの場合は80~120%、Cは40~80%、Dは40%以下としている。博物館評価はこれに定性的な要素を加味しておこなっている。

- ◎「1 資料収集・保管活動」について。自然史課の実績は昨年度及び過去 5 年間平均の 16%以下だったので、「D」と評価している。
 - ◎「2 調査研究活動」について。対象となる期間の学術論文発表数は 40 本で、前年度の 34 本よりもやや多くなっている。一方で研究開始から論文発表に至るまでの時間というのは研究分野によって様々であること、投稿先のレベルなども考慮すべきこと、さらにより高みを目指すという気持ちなどを総合的に勘案して、「B」と評価した。
 - ◎「3 展示活動」について。特別展の合計入場者数は 19 万 8,000 人超で、目標値の 120%を超えた。「A」と評価したいが、個々の特別展については、博物館で設定した目標値と同程度である場合もあって、「B」評価と判断した。
 - ◎「4 教育普及活動」について。学校団体誘致活動の回数、体験プログラムの参加者数、「ミュージアムツアー」の受け入れの開始など、ミュージアム・ティーチャーの積極的な活動によって、質・量ともに目標を上回る実績を残すことができたので、「A」と評価した。
 - ◎「5 広報・情報発信活動」について。これも普及課の努力によって、様々な媒体を用いて、多様な情報発信を多数実施できた。広報・報道で取り上げられた件数以外は全て「A」と評価した。
 - ◎「6 市民との協働」について。博物館ボランティアや自然史・歴史友の会の活動については、計画どおりの活動ができたが、目標以上の補助はかなわなかった。そこでほとんどの指標で「B」と評価した。
 - ◎「7 社会貢献」について。学術研究機関としての活動や研究および教育普及のための資料貸出については例年どおりだったが、特に顕著な成果は上げていないので、「B」と評価した。
 - ◎これらの 7 項目を踏まえた総合評価について。博物館に求められていると考えられる活動の多くについては概ね目標を達成できたと考える。ただし資料の収集やデジタルデータ化などについてはさらなる努力が必要である。そこで総合評価を「B」とした。
- ③外部評価素案（小委員会案）について【岩松副会長】
- （岩松副会長）
- ◎令和元年度の外部評価については、会長代行として、私が小委員会の委員長を務めた。外部評価小委員会の委員の選定については、自然史の専門家として阿部委員、教育の専門家として山本委員、歴史の専門として自分が就任した。
 - ◎本案の作成に際しては、3 名の小委員会委員が博物館の自己評価と博物館年報を精査し、それぞれが評価をおこなったうえで、去る 9 月 8 日に開かれた外部評価小委員会に持ち寄って議論した。その際には、それぞれが自己評価について疑問に思ったことを挙げ、博物館側から回答や説明を受け、意見交換をおこなった。それをふまえて、大幅な変更も含めて調整をおこない、外部評価小委員会案を作成した。
 - ◎その後、外部評価小委員会案を博物館協議会委員に送付したが、期日までに委員からの異論や意見は出されなかった。そこで、外部評価小委員会案を外部評価素案として、今回提出している。ここでは博物館による自己評価に対して、外部評価小委員会からの新たな提案や変更した点などを中心に報告する。
 - ◎なお A・B・C という評価については、私自身も「B」評価が多いことに疑問を持った

が、今回の博物館評価における「B」評価は「普通」という意味ではなく、ほぼ満点だったとしても、あるいは満点を少し超えても「B」評価ということを知って、衝撃を受けた。パーフェクトに近いことをやっても「B」評価となることを理解するのに時間を要した。ただしそれではどうすれば「A」評価となるかという点、まだ議論が整理できているわけではない。

- ◎「1 資料収集・保管活動」について。博物館にとって大変重要なこの指標について、自己評価にある「D」評価については、実際には数字は少なくても、内部のシステム改善に努力していることを評価して「C」評価にしている。また資料収集の「B」評価については、タイプ標本の寄贈を受けていることを高く評価し、学会や社会から認められているということを考えて「A」評価にして、総合評価は「B」とした。
- ◎「2 調査研究活動」について。研究業績に関わる「B」評価のなかで、外部資金獲得については「A」評価にした。館長が研究代表者となり、新たな自然史資料の展示についての研究を学芸員と推進していて、博物館のチームワークが活かされていること、各学芸員がそれぞれの専門分野で調査研究を積極的におこなっていることから、「A」評価とした。論文数や学会発表数についても、「A」評価にした方がよいと考えられることが多いが、「Aに限りなく近いB」という意味での「B」が多くなり、総合評価は「B」としている。
- ◎「3 展示活動」について。これも博物館にとって大変重要な項目だが、自己評価は全て「B」となっている。評価は定性的・定量的の両方を合わせた基準の設定が難しいが、夏の特別展「探検！両生類、は虫類の世界」については「A」評価としている。対象となる両生類・は虫類は、子どもたちや大人の中でも怖いといった印象を一般的には持たれやすいにもかかわらず、この特別展は展示方法の工夫が様々に見られて、幅広い年齢層に興味を持っていただけたことを高く評価したい。特別展については、テーマや内容も全体的にバランスがよく、新しい来館者層の拡大も可能にしていたと考えて、総合評価は「B」とした。
- ◎「4 教育普及活動」について。数値的な目標を上回る実績を上げていて、高く評価した。総合的には「B」評価にしているが、実際には「Aに近いB」と評価している。
- ◎「5 広報・情報発信活動」について。ホームページの充実やSNSの取り組みを高く評価したが、広報・報道で取り上げられた件数については、「B」から「A」に評価を変更している。多様な広告や広報媒体を活用した情報発信ができていると思う。これまでの実績が市民に浸透しているからこそ、マスコミにも注目されていると思われるので、総合評価は「A」としている。
- ◎「6 市民との協働」について。総合的には「B」評価だが、例えば「歴史友の会」の講演会については開催回数も多く、参加者数も大変に充実しているという意見が出されていた。一般市民の参加も可能なので、博物館と市民をつないでいく役割にも貢献していることも指摘できる。
- ◎「7 社会貢献」について。各委員会等の委員就任を見ると、学芸員の高い専門性が評価され、環境や文化財などに関する委員に就任して、幅広い社会貢献がおこなわれていることを強く感じる。学術団体の運営や学会誌の編集等にも関わっている学芸員も少なくない。外部機関の依頼による講演等や所蔵資料の貸出数等も高く評価できる。

以上から、総合評価は「A」にしている。

◎最後の「総合評価」について。これまでの博物館の蓄積を支えてきた人的・物的財産が大きな強みである。このような歴史のなかで多彩な資料収集、効果的展示や展覧会がおこなわれていて、入場者数の増加につながってきていることが評価できる。

◎学芸員による資料収集や保管、それに基づく調査研究活動、さらには市民の生涯学習への活用、論文や学会発表などによる公開、これら様々な活動を評価するとともに、これらが認知されてきたことにより、他の博物館や行政機関から必要とされるようになってきている。教育支援への依頼も増えてきている。このように社会貢献もできている。ほとんどの項目について100%目標を達成していると言うことができる。ただし今後のさらなる活躍を期待したいということで、総合評価は「B」とした。

◎外部評価小委員会で出された主な意見を紹介する。

*「資料収集」については、累積登録数や公開の実現を評価視点に加えてはどうか。

*「展示活動」については、展覧会をどのように評価して「A」などと判断するのか、評価視点が明確でない。展示活動の評価視点は「自然史、歴史に関する市民の興味関心を高めるとともに、質の高い魅力ある展示ができているか」であるが、これでは「A」「B」の判断が難しい。提案としては、この項目を①歴史や自然史に関する市民の興味関心を高めるため効果的な展示がおこなわれているか。②内容が博物館のあり方において重要性が高いかどうか。③各特別展における目標入場者数を達成できているか。このような指標を設定したうえで、評価をおこなうのがよいのではないか。

*各項目には入っていないが、「博物館の理念と方向性」には「ミュージアム・ネット化構想」が掲げられているが、今後どのようにして、この「構想」を実現に向けて進めていくか課題である。

*学術論文の刊行や学会発表については、特に歴史課において増加を期待している。

*博物館が様々な資料を収集・所蔵・管理していることを市民に向けて発信すること、普及講座ではまだ市民に知られていないものがあるようなので、きめ細かく広報をおこなって参加者を募ること、新型コロナウイルス感染症が終息したあとに、以前にも増して学校関係の利用が進むことを期待している。

*学校に関することについては、学習指導要領の改定に伴い、理科の生物に関して、学習内容の履修学年に変更があったので、「博物館利用の手引き」のワークシートの該当年を見直す必要がある。

*友の会やボランティアの活動が高齢者の生きがい作りに寄与するものとなるように、さらに検討してほしい。

議題3 に関する質疑応答 協議会委員 博物館事務局

■他の博物館で評価委員を務めているが、ここでは大変詳細かつ愛情に溢れるかたちで、評価をおこなっていて素晴らしい。見習おうと思う。

■展示活動の評価視点を3つに分けて、より明確にすることを提案されたが、「博物館の膨大な資料を収集・所蔵し学術的な研究を深めていくこと」も評価視点となると思う。コロナ禍のなかで、なぜ博物館が必要なのかということについては、博物館の職員や

関係者が一般の方に理解・納得していただけるように説明していかないといけない。すぐに槍玉に挙げる方もあるなかで、このような市立博物館がきちんと歩んで、よい仕事をして、そのことが市民にとって本当に役立つのである。過去を振り返るだけでなく、未来に向けて取り組んでいることを展示活動で訴えてほしい。そのような発信をアフターコロナでは大事にしてほしい。

■調査研究活動について。この館の特性はやはり調査研究を基にした展覧会や教育活動にあり、一貫してそのような流れが確保できているため、館の活動が極めて魅力的なものになっていると思う。科研費の申請数と採択数を見て驚いたのは、採択率が35%であること。全国平均が22%くらいだから、この館は158%くらい突き抜けている。それが最終的に市民に還元されるのがこの館の強みであり、そのことをもっともっと前に出してほしい。

■この館は公開承認施設である。したがって資料の収集や保管あるいは展示活動のなかで、指定文化財の取扱件数も実績として示す必要がある。

□公開承認施設については5年ごとに認定が更新されるが、その5年間で3回以上重要文化財を公開しなければならないという規定がある。展覧会を計画する際には、どの展覧会で重要文化財の出品を目指すのかについて考えながら進めている。指定文化財特に国指定重要文化財を出品した実績については、博物館年報で展覧会の記録を明示するように努めたい。

■SNSについての本来の評価基準はフォロワー数だと思う。他の博物館の例だが、8月に戦争に関する出土品についての情報を発信すると、今年は「戦後75年」だったこともあり、アクセス数が際立った。博物館の収集資料に対する認知度を高めるためにも、SNSは非常に効果的なツールである。今年度の事業計画のなかで刀剣の展示について説明があると思うが、展覧会を見に来る来館者層が変わってきている。それはSNSでも顕著に見えてくるので、公開しなくても良いが、フォロワー数の推移を追跡して、分析や対策を考えた方がよい。1月の冬の展覧会は大きな変化を生み出すかもしれない、その前後で比較できるようにした方がよいと思う。

■評価指標については、総入館者数や特別展観覧者数、博物館の活動数などが挙げられているが、その目標値はどのようにして設定しているのか。学校団体の誘致活動回数、修学旅行についても目標値が設定されているが、「より多く」を目指したとしても上限があると思う。来館者が最適な博物館体験をする際には限度があると思う。その両方について、どのように考えているか、教えてほしい。

□特別展の入場者数については、過去の実績をもとに、展覧会の入場者数のシミュレーションをおこない、目標値を定めている。より良い展覧会を多くの方に見ていただくことが博物館の魅力をアピールし、博物館活動の普及につながるとして取り組んでいる。

□誘致活動については、平成29年末にスペースワールドが閉園したこともあり、修学旅行者数が平成28年度は3万3,000人、29年度は3万人だったのが、30年度は1万4,000人で、令和元年度は1万2,000人と減少している。当博物館はリピーターが多く、以前に修学旅行で行ったなど、夏を中心に、家族連れで九州各地から来ていただいている。当館は西日本最大級の総合博物館であり、やはり多くの方に来ていただきたい。

学校教育の一環として博物館に来ていただくのが効果的だと考えていて、誘致活動については積極的に取り組んでいるという状況がある。

- 入場者の上限、特に特別展の上限については、1日当たりの入場者数の上限を考えるべきだと考える。その上限については分からないが、少なくとも現在までに開催した夏の特別展を見ると、1日8,000人という人数になると、ゆっくり見ていただくことはできない。このことは認識している。コロナ対策の関連で、1日の入館者数を規定したので、今後は例えば1日8,000人の来館者があっても、分散して来ていただければ入館者にもゆったりと観覧いただくとともに、数字も目標値に達することができるかもしれないと期待しつつ、来年度はそのような設計をしていきたいと考えている。
 - 予約システムが導入されたので、バッキンガム宮殿のように10分・15分ごとに予約を受け付けして、並ぶこと自体も避けるようにしているから、そのようなシステムを有効に利用することはあり得ると思う。
 - 収蔵資料のデータベース化については、件数だけであれば評価は難しく、写真撮影や計測など様々なレベルをふまえて、それを反映できるような評価基準・指標があった方がよいと思う。
 - 自然史課については、一律に考えてきたので、今後は画像や公開の有無を含めて検討していきたいと思う。
 - 博物館が非常に膨大な資料を蓄積して、特別展や企画展などのなかで工夫して展示をおこなっていることは、博物館の意義や価値を市民に知らせるという意味でも貴重な機会になっている。
 - 学校の教職員が博物館に足を運んで、授業やいろいろな活動の中で、博物館にこんなものがある、博物館に行ったらこんな体験ができるというようなことを語ってくれれば、子どもたちも行ってみたいと思うし、校外学習などで行く機会があったときに、期待を持って来ることができる。その意味でも、教員とかが積極的に地元でこういう施設があって、利用できるような体制をとって欲しいという要望に、減免も含めて、進めていただいている。今後も引き続き配慮してほしい。
 - 学習指導要領が改訂されたなかで、博物館利用の手引やワークシートも修正していくことも検討して、学校での授業や教育活動とも関連づけるかたちで、博物館の活用を継続していくことを検討してほしい。
 - 博物館の年報にしても評価にしても、細かいところまで丁寧に見て書いている。それを見ると大変いい仕事をしているという印象を受ける。科研費の採択率については、研究代表者の出した科研費の申請書数で算定すると、10本のうち採択が5本なので、大変高いと思って感心している。
- ◎阿部会長より、外部評価素案について様々な貴重な意見が出されたので、必要な修正をおこなって確定させるが、それについては、岩松副会長（外部評価小委員会委員長）と会長の私に一任してほしいとの要請がなされ、異議なく了承された。
- ◎事務局より、自己評価および外部評価については、確定後に協議会全委員に確定版を送付すること、その後、「北九州市立自然史・歴史博物館自己評価および外部評価実施要領」6の規定に基づいて、博物館のホームページで紹介することについて、説明が

なされた。

- ◎阿部会長より、今回は1回目の外部評価で、実施については、昨年度の協議会で検討した方法に従っておこなったが、今後の評価については、このコロナ感染症の影響があつて、数値目標がなかなか立てづらいものもあるので、内容については一部見直すことになると思う。どのように工夫して内容を変えていくかということについては、来年度の外部評価小委員会での検討するとの提案がなされ、了承された。

議題4 令和2年度事業計画について

- ◎栗原普及課長より、組織・運営体制、予算、入館者数について説明がなされた。
- *博物館の組織・運営体制について。館長が上田から伊澤へ、副館長が石神から小坪へ、普及課長が福岡から栗原へ交代した。普及課職員に一部異動があつた。
 - *予算について。今年度の歳出予算額は総額が3億3,290万4,000円となっている。昨年度が3億2,502万7,000円なので、787万7,000円増加している。主な要因は、企画展・特別展開催経費が昨年度4,997万2,000円から、今年度6,000万円と、1,000万円ほど増額している。夏に開催を予定していた特別展がより大規模なものであり、増額していた。
 - *また資料整備・調査研究費が1,177万2,000円から1,252万8,000円と75万6,000円、6.4%増額となっている。博物館として基本的で重要な課題である資料整備・調査研究の予算を増額して取り組んでいる。
 - *さらに新型コロナウイルス感染症対策として、空調設備の改修について、国補助を受けて2,000万円、9月に補正をおこなって増額した。
 - *これまでの入館者数については、10月末までの数字で説明したい。4月は全て休館、5月は18日まで休館し、さらに30日から6月21日まで休館した。7月の段階では未だWEB予約システムが導入されておらず、平日のみの開館だった。8月から土日祝日も開館して、来館者数が増加している。9月が約1万7,000人、10月が約1万6,000人となっている。土日祝日についてはいま大体1,200人くらいの来館者があり、平日については大体400人という状況である。平日については団体がかなり大きな割合を占めている。10月末現在で入館者数5万8,916人、昨年度の同時期で36万694人であるので、減少数は30万1,778人、去年の16.3%しか入っていないという状況である。当館の場合は、夏の特別展が一番大きな割合を占め、10万人を超えてくるので、それが開催されなかった影響が非常に大きかったと思う。今年度は最終的には13万人強くらいになるのではないかと推測している。
- ◎日比野歴史課長より、冬の特別展を中心に、東アジア友好博物館交流事業や東田地区ミュージアムパーク創造事業などについて説明がなされた。
- *お手元にチラシを配付しているが、「名刀「博多藤四郎」の輝き―戦国を生き抜いた武士の絆―」を開催する。「博多藤四郎」と呼ばれる刀は、福岡藩2代藩主黒田忠之から小倉藩初代藩主小笠原忠真に贈られたもので、国の重要文化財であり、文化庁が所蔵している。「地域ゆかりの文化資産」を公開していく文化庁の補助事業としておこなうものである。北九州市域は豊前國小倉藩領と筑前国福岡藩領から構成されているので、その両藩の間を結んだ刀ということで、北九州市ゆかりの重要文化財

であり、北九州市で初公開する。この「博多藤四郎」を軸に、戦国時代が終わった後、2代目藩主が戦国の戦乱から荒廃した農村を復興しながら、新しい国づくりをおこなったが、それが江戸時代の長い「太平の世」を実現していくことになった。これまで戦国武将や初代藩主が注目されることが多かったが、その次をやるというのが今回の展覧会の特徴である。

* 今秋予定していた「北九州・産業都市の軌跡」については、「東田地区ミュージアムパーク創造事業」の連携企画展であるが、こちらは新型コロナウイルス感染症対策の一環として開催を見送ったが、来春に順延して実施する予定である。

* 東アジア友好博物館交流事業について。今年度は韓国仁川広域市で館長会議が開催されるが、当然韓国に行けないので、オンラインで会議をおこなうことになった。11月30日に予定している。第3回巡回展として、衣食住の住に関する展示として、仁川市博から化粧室・トイレをテーマに企画がなされている。そろそろ仁川で展示が始まる運びである。北九州市はTOTOという衛生陶器の会社があり、同社に協力を仰ぎながら、日中韓3国の比較を含めて、当館では考古学の時代から現代までを考える展覧会を考えている。この巡回展に関する詳しい検討を館長会議でおこなう。

* 東田地区ミュージアムパーク創造事業について。今年度から文化庁の「クラスター事業」も事業の名称や内容が変わって、北九州市もかなり苦勞したが、2次募集で採択される見通しである。今年度から5年間をかけて、様々な事業を実施する計画であり、いまから再スタートをするという状況である。その一環として連携企画展が位置づけられている。

◎真鍋自然史課長より、特別展を中心に説明がなされた。

* 今年の春には「まるごとウマ展」を3月20日から5月10日まで開催する予定で、展示作業は全て終わっていたが、中止せざるを得なかった。夏については、「THE モンスターⅡ」という特別展を計画していたが中止した。しかしこの2つの特別展については、近いうちにあらためて実施したいと計画を練っている。

* 今年度最後の春の特別展については、3月6日から4月4日まで、「私たちは収蔵庫にいるんです」(仮題)というテーマで、常設展示をされていない、面白い、または大きな、もしくは興味深いなどの特徴を持った資料を展示する予定である。併せて、博物館のバックヤードでどんな仕事をしているかということも紹介して、博物館の役割を知っていただきたいと考えている。さらに、「密」になるようなことを避けるために、ウィズコロナ、もしくはアフターコロナで、どのような展示会ができるかということも、少し実験的なことを加えながらやっていくように計画を立てている。

◎以上の事務局の説明に対し、特段の質問や意見は出されず、今年度の事業計画は承認された。

議題5 その他

◎事務局からは特になし。

◎各委員より、次のような意見が出され、それに対する事務局の応答がなされた。

■最近ミュージアムショップのグッズが非常に大きな魅力の源になっている。こちら

も実際ナイスなミュージアムグッズを見せてもらって、博物館のアイデンティティーが発揮されていて、魅力の一つとなっていると思う。でもこのようなミュージアムの多彩な楽しみは博物館の現行の評価基準には入っていない。確かに博物館の「理念と方向性」と評価基準は相応していて、「知」ということが博物館のアイデンティティーになっている。しかし一方で、将来を考えると、現在はまだ萌芽段階のミュージアムの魅力がだんだんと顕在化していくことがある。堅持すべき路線と新たに追加すべき価値観が出てくるだろう。その時にミュージアムグッズについて博物館のオリジナリティー、資料収集などの博物館の活動、市民との関わりなどが反映されたとすれば、それらも立派な実績だと思う。ささいなことでも博物館年報に記載して、評価基準に反映できるような仕組みが必要だと思う。

□ミュージアムショップについては、場所貸しのようなかたちで、売り上げが博物館に影響をおよぼすということはない。契約としては目的外使用で、使用料だけ徴収しているという状況である。ただし、ミュージアムショップが果たす役割というのは非常に大きいので、特別展の開催にあたって展示のテーマに沿った品物を販売し、学芸員とミュージアムショップで意見交換をおこない、ショップを魅力的なものにするように取り組んでいる。また博物館の月例会でもショップの商品を紹介してもらっている。メールマガジンの懸賞品にも、ミュージアムショップの商品を選んでいる。博物館にとってミュージアムショップは欠かせない存在と位置づけている。

■他館の例だが、ミュージアムショップの売り上げに応じて、博物館の収入も変わってくるようにしている。やり方によってはできるのではないか。1年間に45・50万人が入る博物館ならグッズもそれなりに売れるので、検討してはどうか。

■ミュージアムグッズは博物館の教育のツールであるという考え方がある。持ち帰ると、そこから会話が広がり、さらに調べることによって学びが深まるということがある。ミュージアムグッズについて、「美術館のかけらをおうちに持って帰ってもらおう」といった言葉が評判になったことがある。

■大学との連携によって、あるいは障がい者が作ったグッズなど、様々な可能性がある。障がい者の就労支援や社会参画のフィールドにもなると思う。

■博物館の外観や周辺の景観について、「いのちのたび博物館」という看板が、色あせてきている。鉄道からの景観としては、スペースワールドがなくなって、ショッピングセンターの大きさが目立って、博物館が小さく見えてしまう。博物館を1枚の写真として撮影したらどういう印象になるのか。歴史的建造物を活用した博物館であれば、その外観の写真が博物館の発信するイメージになると思うが、この博物館の場合は、恐竜の写真を見せると、学生たちもすぐに分かることが多い。例えば、周囲に象徴となる植物を植えるとか、印象的な絵をどのようにPRしていくのかということを含めて、景観やイメージの発信が欲しいと思う。

■北九州市ミュージアムパーク創造事業については、博物館が中核館であるが、近隣に新科学館が新築移転する。その際に小さいお子様連れも安心して、落ち着いた気持ちで各施設を楽しんだり、ゆったりとした時間を過ごしていただく空間作りがなされ、それが各施設の魅力を増進するという考え方を持っている。この場でも出された意見も反映したい。

- 新型コロナウイルス感染症対策の記録について、50年後、100年後の職員が同じ事態に遭った時に参考にできるようなものを残すことをお勧めしたい。
- コロナ関連については、ワーキンググループを作って検討をおこなっている。それについては全て会議録を作成している。どうかたちで意思決定されていったのか、検証できると思う。
- 常設展示について、科研費の研究成果であることを明示しているか。
- 何度か期間限定でおこなったことはある。
- 科研費採択の実績がゆたかなので、「科研スペシャル」のようなかたちで展示や企画をやってほしいと思う。博物館の学芸員は北九州市の子どもの憧れの存在になって、市民のプライドにもつながるのではないかと思う。
- 子どもたちが、博物館に行く憧れの人に会えるというような気持ちになると思う。科研費や外部資金などの成果を表示するラベルが示されると、「何これ？」に始まり、研究の成果が展示になることが子どもたちに伝わるようになる。教員もそういうことを言えば、研究によって学芸員として勤務できるという、キャリア意識にもつながる。
- 佐賀県が「明治維新150周年」の企画展をしていて、「私も佐賀の子に生まれたかった」という反応があった。市民としてのプライドを形成していくような工夫も、展示などの企画に出されてもよいと思う。例えば近代化のなかでの北九州の役割は非常に重要なので、その事実を淡々と伝えるだけでなく、そういうシビックプライドを醸成することをお願いしたい。
- もちろん学芸員の研究もそういう活用ができると思うが、当館の特徴の1つとして、市民が地元で発掘した化石なども展示されているので、それらもシビックプライドにつながると思う。そういう視点からの展示会なども計画してみたい。
- 博物館実習生を受け入れる際に志望動機を書いていただくが、それを読んだなかで、印象深く思ったのは、小さい時に博物館に来て、学芸員の説明を聞き、学芸員の資格を取りたい、そういう道に進みたいと思ったというものがあった。そういう取り組みを地道におこなうことが、博物館利用の裾野を広げていくと実感している。
- 新型コロナウイルス感染症対策のなかで、感染の状況を見ながらであるとは思いますが、今後についてどういう見通しを持っているか、あれば教えてほしい。
- 博物館で下敷きとミニチュアの恐竜を買って、特別支援学級の生徒のお土産にしたが、子どもたちが非常に喜んで盛り上がった。ミュージアムショップで売っているグッズは「博物館のかけらを持って帰る」「教育のツール」になるという発言はそのとおりのと思う。写真撮影が許可されているのも同様の意味を持っている。
- 新型コロナウイルス感染症対策については、北九州市に危機管理室があり、その危機管理参与に現場を見て、調査していただいて指示を受けている。専門家の知見を十分に活用して、安全・安心の観点から、来館者対応に変更をおこなう際に危機管理参与の指導を仰いでいる。
- ミュージアムショップについては、今は目的外使用ということになっているが、実際には目的の場所になりつつあるので、ショップの位置づけを変更することもありかもしれない。教育の一環にも収益の一環にもなることを各委員の意見を聞いて思った。

- ◎以上で意見交換が終了し、阿部会長より、進行が事務局に返された。
- ◎事務局より、協議会を終了するにあたって、議事録を作成して、協議会の委員に郵送するので、不明な点や修正点があれば寄せて欲しいとの依頼がなされた。
- ◎最後に、伊澤館長より、フリーディスカッションの際の各委員の発言が非常に参考になること、博物館の外部評価についてもホームページで公開するだけでなく、全職員で共有して、評価された点や改善を求められた点を来年度に向けて少しずつ頑張っ取り組みたいと思う、との挨拶がなされた。
- ◎以上をもって協議会は終了した。終了後、歴史ゾーンのぽけっとミュージアムで明日から開催する企画展について、担当学芸員の現地説明会がおこなわれた。また協議会の会場であるガイド館を出た場所で、来館者のコロナ対策の様子を説明した。

(議事録要旨作成：日比野利信)